八幡神社本殿調査報告書

熊谷市教育委員会

八幡神社本殿調査報告書

八幡神社の歴史

新編武蔵風土記稿には、「八幡社、村の鎮守なり、神体の伝へ当社を、延喜式内田中天神なりといえり、されど證とすべきこともなし。此地は古鶴岡八幡宮の社領にして、殊に文書にも村名の條に載たる如く、寿永二年鶴岡八幡領となりし地なれば、彼社遥拝のため勧請せしものにて、其頃より鎮座なることは知るべし。田中天神のことは延命寺の天神にも云處なれば、何れが正しきを知らず……」と書あげているが、訪瓢録には「八幡社、上野にあり、松林蒼鬱境頗幽邃、廟の四周皆彫鏤金碧、屋宇に荷次を次す、又前に拝殿一宇を起す、近りて舞台を設く、此廟金毘羅と王子稲荷を配祀す、神主篠田中務、土人云、八幡太郎義家奥州追伐の

係 金子
議 [illegible]
主査
係長
主幹
課長補佐
課長
教育次長
教育長

熊谷市教育委員会
受
63.7.27
付
教社収第535号

時、旌旗をここにとどめ勝利を祈請す、伏誅の後奥羽守防のため此祠を建、故に鳥居よりして皆北向すると云、当時陣営ありし処今十六町と称す、秘本武蔵志に云、此地は古鶴八幡宮の社領にして、殊に文書にも村名の條に載たる如く、寿永二年鶴岡八幡社領となりし地なれば、彼社遥拝のために勧請せしものにて、其頃より鎮座なることは知るべし、神明社今此地に移す、神主中務云、八幡太郎義家奥州より帰陣の時、自ら着たる甲冑を此社に納む……」と録し、両書とも古文書による鎌倉初期創建説をあげているが訪瓢録では義家

伝説も重視していることや、大里郡神社誌の「鎮守府将軍源頼義英子義家と共に奥州征伐の砌り此地に本陣を設け、假りに鶴ヶ岡八幡の遥拝所を立てて戰捷を祈りしと、当社の創立起因とす……」の記事も注目すべきであろう。

本殿の建築

身舎は表五尺六寸　妻五尺　向拝柱の出六尺二寸五分からなる一間社流造で、正面に軒唐破風及び千鳥破風を付し豊富な彫刻を付した華麗な本殿であるが、建立当初は軸部は丹塗とし各彫刻は極彩色を施したの

で　この地方にみられない荘麗な建物であったと想像される、本殿の建立は棟札によって明和五年（一七六八）であるが、他にも棟札があり明治十三年（一八八〇）銅板瓦棒葺（カワラボウ）に葺替えを行なっている　当初は現存する軒積（ノキヅミ）から柿葺（コケラブキ）と思われる、棟札の墨書は次の通りである。

明和五年の棟札

（表）

明和五戊子年

奉造立八幡宮遷宮天長地久諸願成就所

十一月二十五日　当所大小惣氏子中

（裏）

当所　神主　篠田外記

大小惣氏子中

大工　内田清八

明治十三年の棟札

（表）

天皇明治第十三年第十月第二十五日　当村氏子中

八幡神社御銅御屋根御玉垣修繕奏功正迂宮奉仕標也

齋主　篠田臣民彌

（裏）六十余名の人名あり

社殿は幣殿左右から瓦葺の透塀をまわした中に　軽量鉄骨造の覆屋の中に立ち、　保存状態は良好である、身舎は亀腹石の上に地覆を据え、　柱は円柱で雲文に円文ちらしの地彫を施し、　地覆上端に柱ほどの羽目をとり地長押をまわす、　羽目には海馬の彫刻を付し、　地長押上の柱から波文及び竜頭の持送り彫刻を出して、　椽を支える組物をうける、　地長押上の羽目には唐子遊びの彫刻を付すが、　人物を得意とした彫工の至芸によつ

て生彩をはなっている。縁は布縁板とし勾欄ともまわすが、妻側は脇障子で勾欄を区切り、表側、階の部分は宝珠束にて勾欄をうける、宝珠束は八角形の角を几帳面とりとした異色の束で、上部の節の太い宝珠まで一木から作りだしている、縁板上端に切目長押、腰長押、内法長押をまわし、柱頭は頭貫で締結し、外側の木鼻は唐獅子である、腰長押と内法長押の間は、表側のみ柱際を小脇板とし鶴の彫刻を付して方建を立て、方建に接し軸摺の桟唐戸である、桟唐戸は鏡板の全面に彫刻を付した華麗な唐戸で、彫刻は宝づくし、義家

奉納の旗と軍配うちわ、鎖鎌等、多彩である、両側と背面は羽目板とし、各面に七福神の彫刻を付す、柱頭には三手先の科組を配し、桁及び桁と組合せた妻虹梁をうけ、科組の間は蟇股とし、蟇股も外形はとのい彫刻は輪郭内におさめている、三手先の科組は尾垂木を竜頭や獏の彫刻とした賑やかな科組で、彫刻の多い建物にみられる形式である、妻虹梁上端には指桁下に二手先科組を配し、指桁と組合せた二重虹梁をうける、科組のあいだの支輪は彫刻支輪で賑やかな妻飾りである、向拝は角柱、几帳面とり足元に浜縁を付す、浜縁は切石上に地覆を据え、羽目は彫刻とし縁葛、縁束まで地彫を施した切目縁で板上端銅板張(後補)とし、幣殿の床が縁葛下端で前面の彫刻は見えない。向拝は浜縁板上端に半長押、彫刻の羽目、長押とし長

押上端が向拝床である、長押上端から五級の階で身舎の縁にのぼり、階には両側に登り勾欄を付す、向拝柱頭は虹梁を組架け、身舎とは海老虹梁にてつなぎ、外側に木鼻を付すが向拝虹梁は梅の文様を地彫から浮かせたり、眉決りの部分にも唐草文様を浮かせる等、随分入工のかかる手法が施されている、さらに柱頭には科組をおき、桁及び菖蒲桁、手挟を支え、虹梁と桁の間は丸彫の竜で迫力ある刀痕がみられる、軒は二重繁極木とし、茅負に軒唐破風を組込んでいるが軒唐破風の懸魚は牡丹彫刻で破風と一本木であるのも珍し

い、身舎の破風は眉(マユ)状(ジョウ)りをなし、前面は向拝まで一連の曲線で構成し、後側は桁及び軒先に合せ前面の破風と調和をたもつ曲線とし、流造の前後ことなる破風を、たくみに調和せしめ鬣(ケタガシラ)、桁隠を付す、破風には裏甲、軒積(ノキヅミ)をかさね、銅板包(ツツ)みの葺地(フキジ)を軒積より出して軒積の腐朽を防止している、向拝の軒先は特に軒唐破風の部分は軒積下端を蛇腹(ジャバラ)にする等、こまかい部分まで意を注いでいる、屋根は銅瓦葺とし、棟には鬼板(オニイタ)箱棟(ハコムネ)を付し、箱棟には千木(チギ)、勝男木(カツオギ)を付している。

この本殿は構造材の表面にも地彫を施し、羽目板部分にもすべて彫刻を付した、典型的彫刻充塡式の建物で、かかる型式の建物が大衆に歓迎された時代の所産であり、之にもとずいて検討すべきである、豊富な彫刻も私人芸で、あくまで建物の部材として観賞すべきで

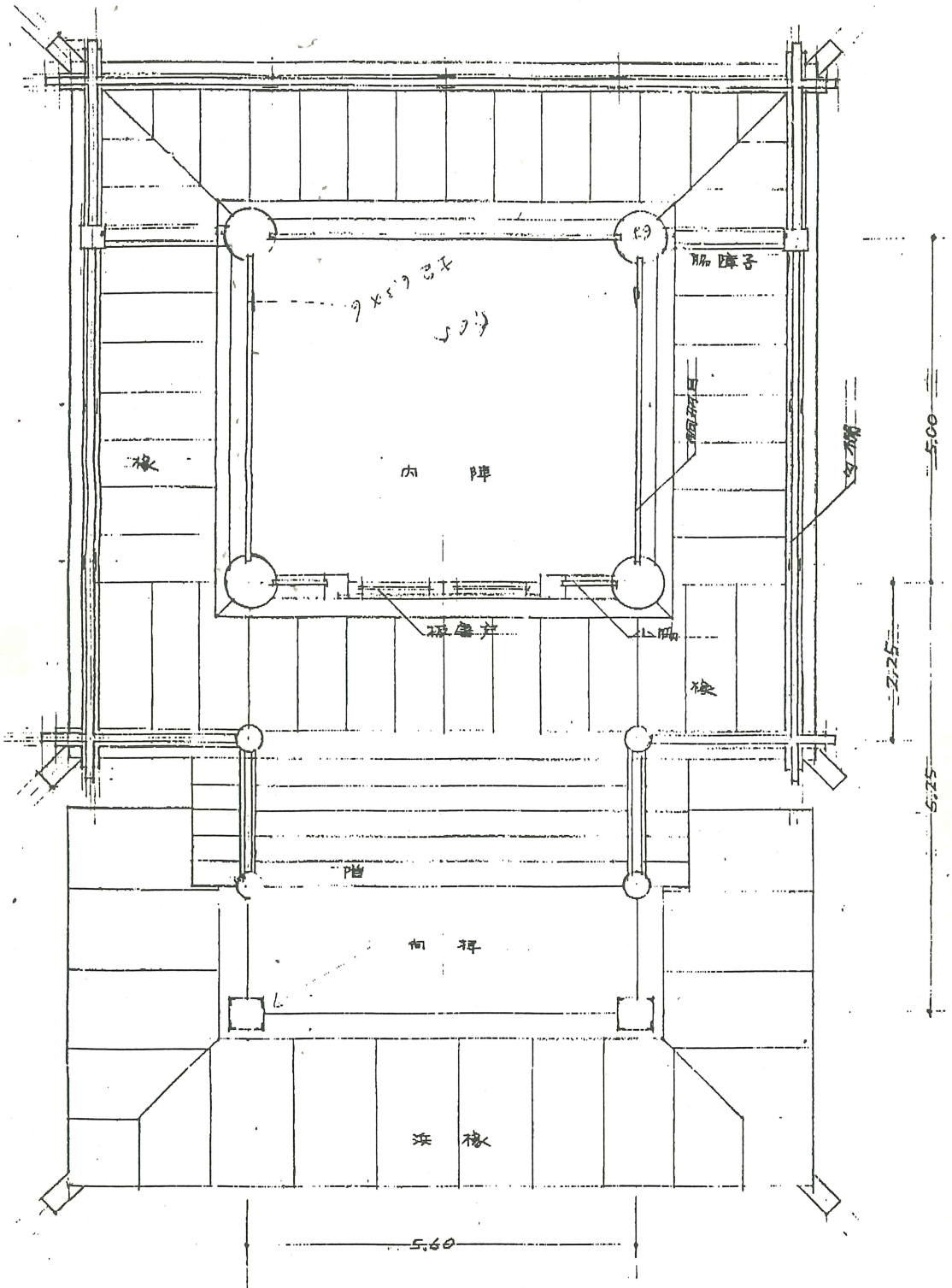
ある彫刻の中でも彫工が精魂をかたむけたのは、七福神の胴羽目彫刻であろう、辯才天女は一般には琵琶を持つが、この彫刻では横長の琴とし、二人の唐子と共に下方をたくみに造形している、これなど下絵の段階で琵琶では横のひろがりがなく、琴の台も大きな台として調和をはかったことが窺える、次の大黒が揮毫した書画を寿老人が批判している彫刻でも寿老人の批判如何にと聞耳をたてる大黒の表情は実に豊かである、この彫刻でも唐子をふくめ人物は三人で祝福の図柄であるので三という数も重視したのである。

床下の唐子あそびの彫刻も社寺彫刻の逸品である、
之等の彫刻の類似性から、この本殿造営時の範とした
のは、妻沼の聖天堂である、聖天堂本殿は寛保元年(一
七四一)上棟　寛保年中に竣工したと思われる　装飾に
意をそそいだ気品ある名建築で　工匠は妻沼の林兵庫
正清である。この本殿の工匠、内田清八は林家の門人
と思われる。この本殿は造営年代が明瞭で　精巧をき
わめた建物としては古く、他に類例がないと思われ保
存措置を講すべき建物と思われる。

調査員　有限会社荒木社寺設計
代表者　坂本才一郎

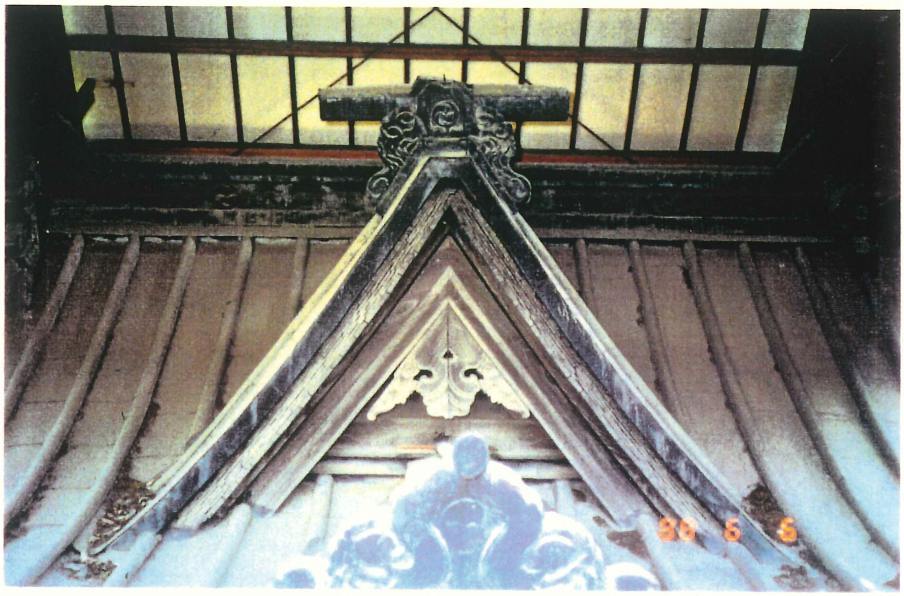
参考文献

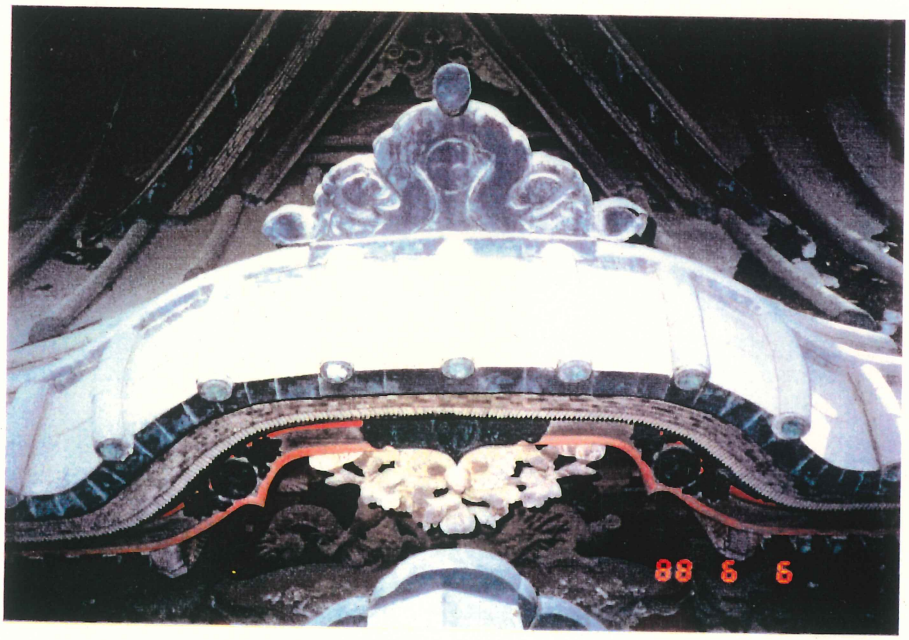
新編武蔵国風土記稿
訪瓶録
大里郡神社誌
福神の研究（喜田貞吉著）
毒沼町史



承認	調査	設計	設計年月日	全業	No.	工事名 熊谷市大字三ヶ尻1271
	63. 6. 6.		63. 7. 14～15 報告書16～17,18			図面名 八幡神社本殿平面図

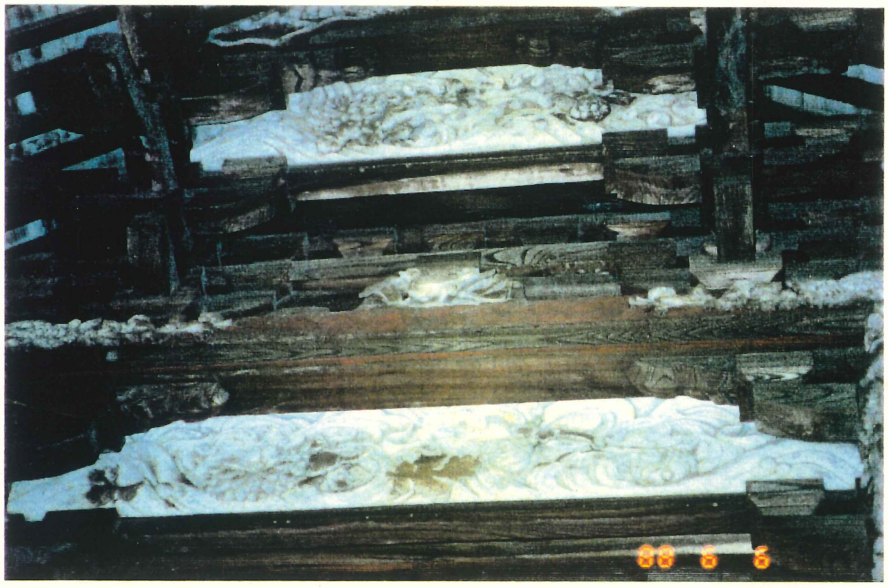
11 01 25

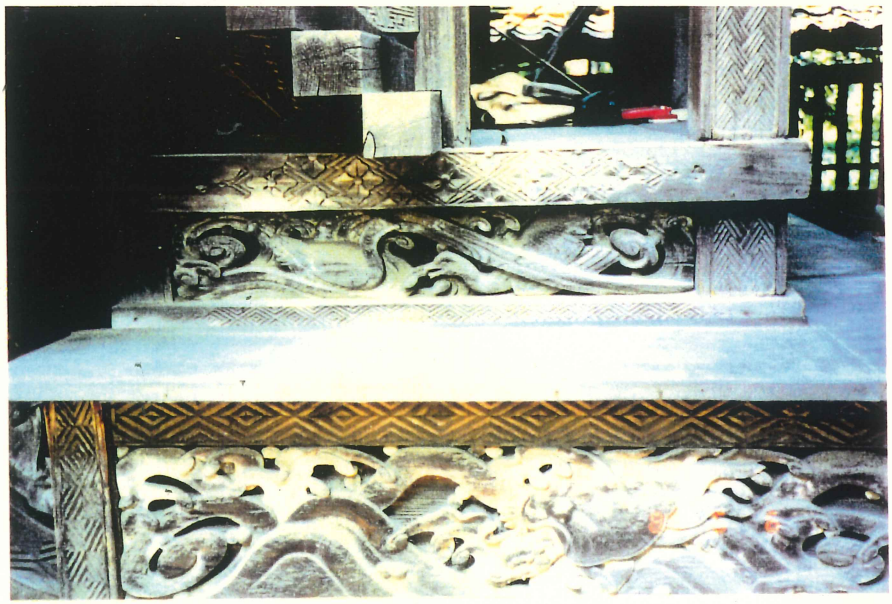

88 6 6

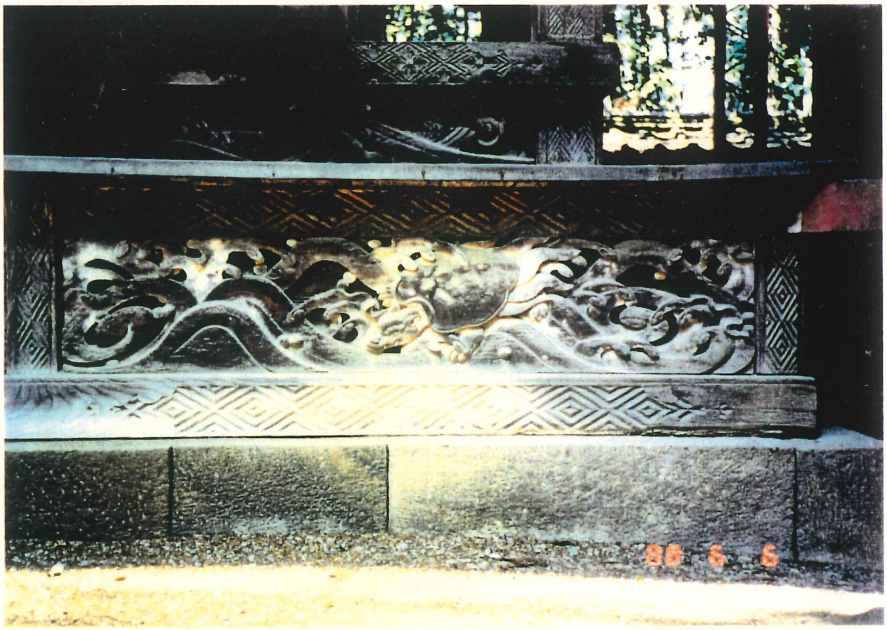

88 6 6

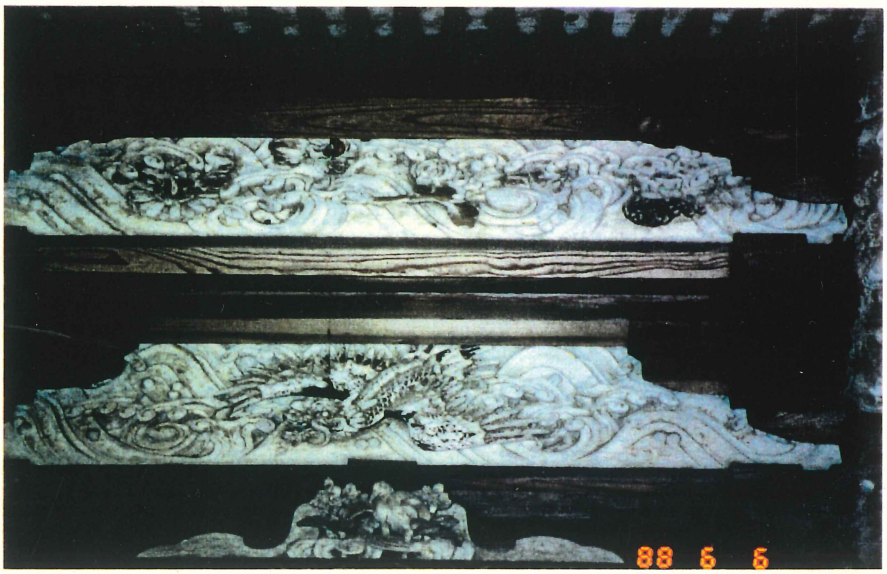
88 6 6

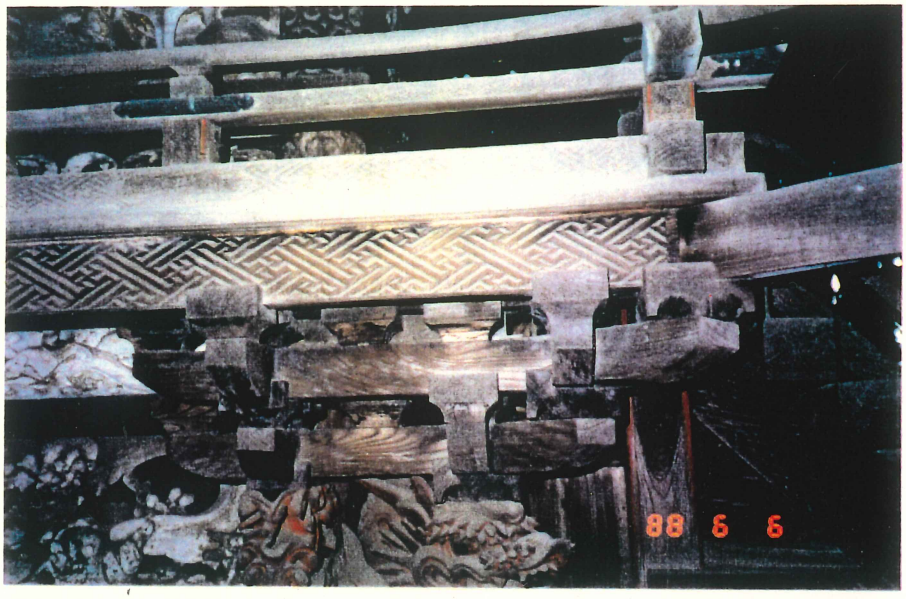
88 6 6

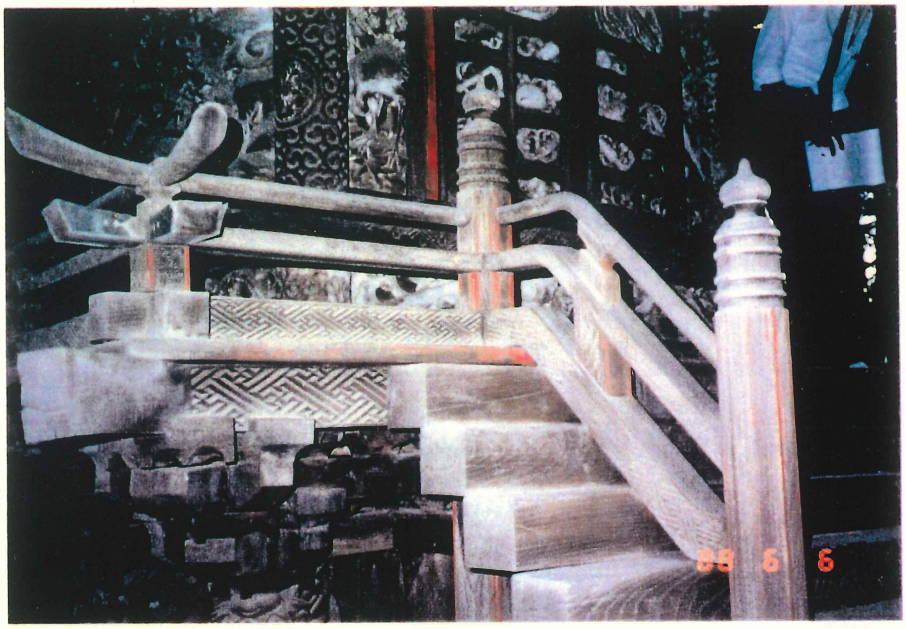

88 6 6

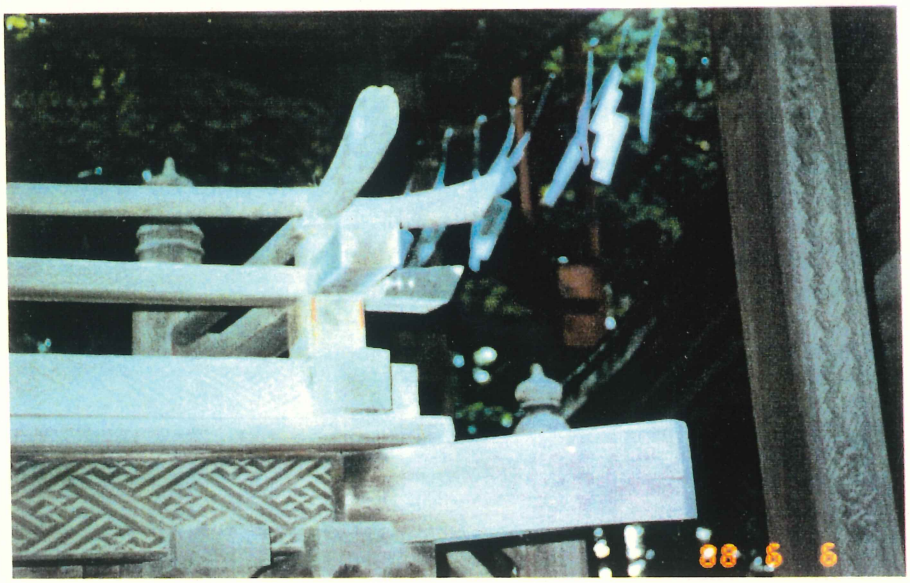


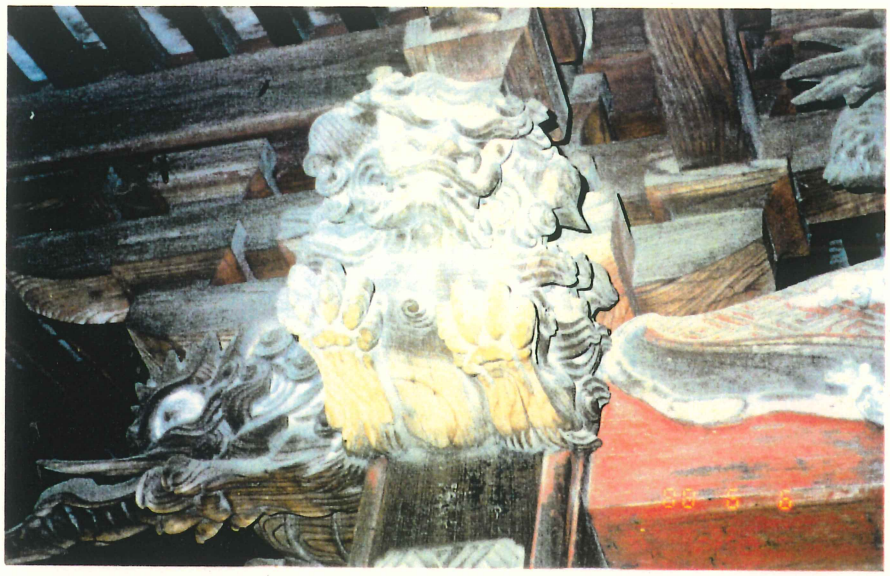

88 6 6

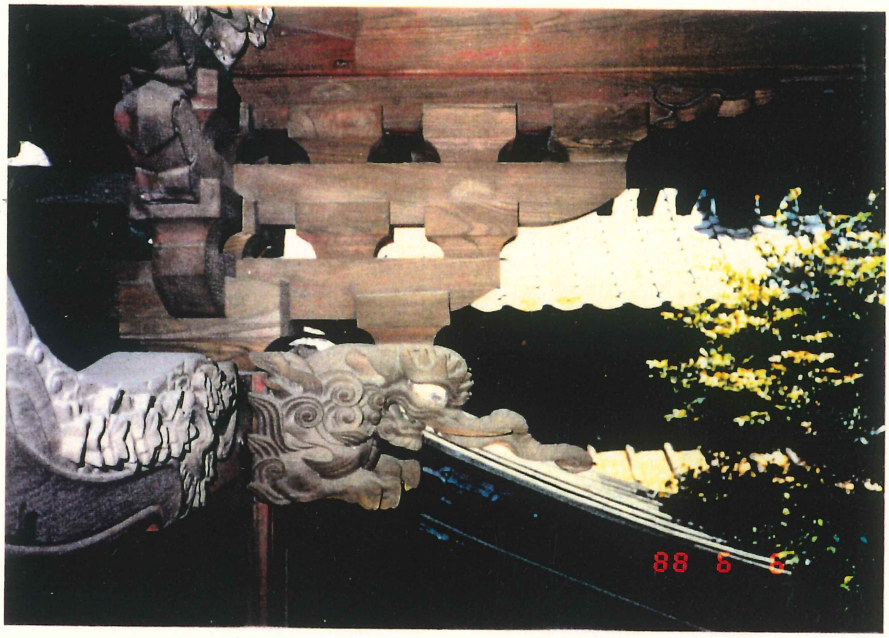

88 6 6

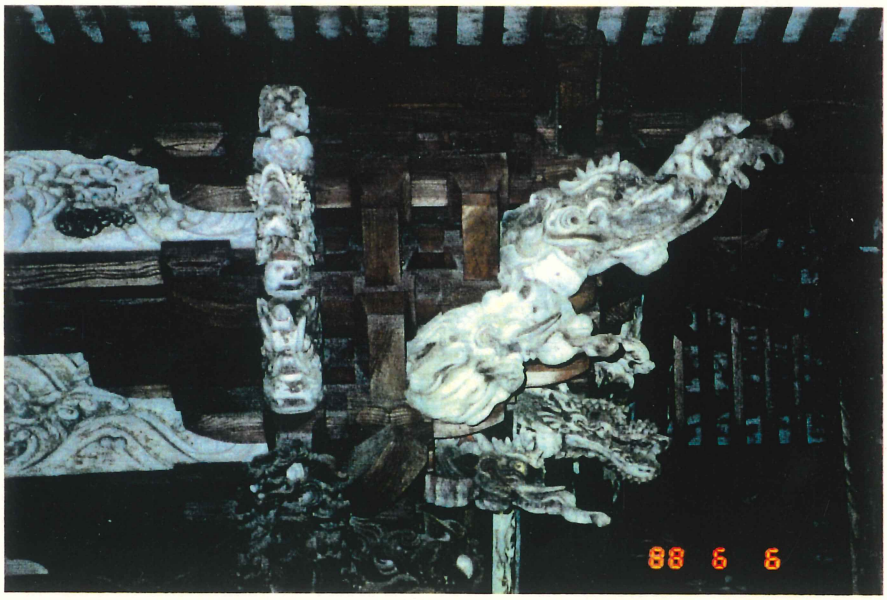

88 6 6


88 6 6

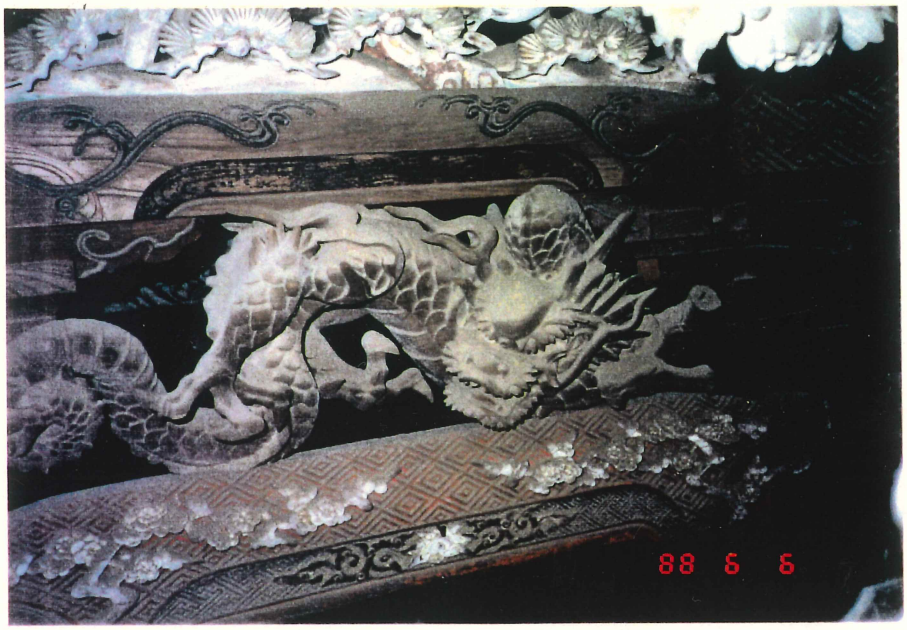

88 6 6


88 6 6


88 6 6


88 6 6

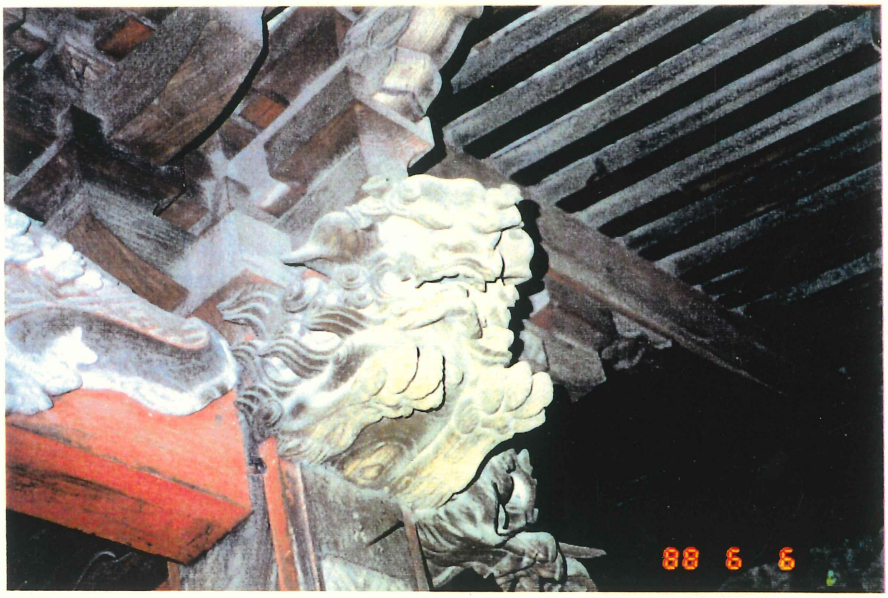
88 6 6


88 6 6

88 6 6

88 6 6

88 6 6


88 6 6